

高校生の主観的学校ストレス、ストレス反応、 および友人関係の関連における性差の検討

吉原 寛*, 藤生 英行**

(平成22年6月18日受付, 平成22年12月3日受理)

The Examination of Gender Differences in the Relationship between Subjective School Stressor and Stress Response and/or Friendships of High School Students

YOSHIHARA Hiroshi *, FUJIU Hideyuki **

The purpose of this study was to examine gender differences in the relationship between friendship and stress. Participants were high school males($N=209$) and females($N=274$). The scales for investigation were Friendship Scale(FS), School Stressor Measure where focus was put in the Subjective Contents(SSMS), and Stress Response Scale(SRS). The examination of the model of males and females was done by using path analysis. The results indicated, (1) for males, there were many direct effects from FS to SRS seen, (2) for females, there were many indirect effects from FS to SRS seen, (3) many influences of SRS from SSMS were seen with both males and females. There were many statistical significant paths to indifference among males and to depressive-anxious feeling among females. It was suggested that mechanism was different by gender differences as above.

Key words : gender differences, school stressor, stress response, friendships, high school students

I 問題と目的

本研究では、学校ストレスとストレス反応に友人関係の影響を踏まえたモデルを考え、その性差について検討することを目的とする。

学校ストレスの研究においては、ストレスやストレス反応などの学校ストレスに関する要因について、性差が存在していることが多くの研究で明らかになっている(例えば、三浦・川岡, 2008; 坂・真中, 2002)⁽¹²⁾⁽²⁰⁾。しかし、学校ストレスとストレス反応との関係において、性差によるメカニズムの違いについての研究はあまり見られない。それぞれの要因における性差だけではなく、要因間におけるメカニズムの違いについて性差を踏まえた知見が得られれば、学校ストレスの低減に有効な手段になると思われる。また、吉原・藤生(2005)⁽³²⁾では学校ストレスモデルにおける関連要因として、友人関係が影響しているということを指摘している。

高校生活において友人関係が及ぼす影響は大きい。肯定的な要因としてはソーシャルサポートによるストレス低減の役割があり、否定的な要因としてはストレスとしてストレスを高めることになりうる。一方で友人関

係には性差が存在していることも明らかになっている(例えば、榎本, 1999)⁽¹⁾。本研究では、学校ストレスとストレス反応、友人関係の3つの要因を取り上げ性差について検討する。

最初に学校ストレス、ストレス反応、友人関係の先行研究について性差を踏まえて概観する。

これまでの学校ストレスの研究は、三浦・川岡(2008)⁽¹²⁾のように、「教師との関係」「学業」「友人との関係」「部活動」「校則・規制」といった学校における日常生活のある一場面を捉えた尺度がほとんどである(例えば、菅・上地, 1996; 嶋田, 1998; 坂・真中, 2002)⁽²⁶⁾⁽²⁴⁾⁽²⁰⁾。これに対して、吉原・藤生(2001)⁽³⁰⁾では、ストレス過程において環境刺激を嫌悪的であると認知する個人的要因に焦点を当てた武井(1998)⁽²⁷⁾の観点を参考にして、新たに、主観的内容に焦点を当てた高校生用学校ストレス(以下主観的学校ストレス)尺度を作成している。生徒には、学校におけるある一場面に対してある感情が生まれ、その感情をどの程度嫌悪的に感じるかといった過程が存在すると思われる。吉原・藤生(2001)⁽³⁰⁾では、自己に対する未熟さや情けなさを感じるストレ

*兵庫教育大学大学院連合学校教育学専攻科学生 (Doctoral program student of Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

**筑波大学 (University of Tsukuba)

サーである「自己能力の低さ」、人から自分に不利になるようなことをされていると感じるストレスサーである「人から受ける不利益」、時間に対する不満を感じるストレスサーである「有意義な時間の欲求」、人から悪い評価をされていると感じるストレスサーである「人からの評価」、人とうまくやっていけないと感じるストレスサーである「人とのつきあい方」、結果が悪そうだと感じるストレスサーである「悪い結果の予想」の6因子を抽出している。

高校生を対象とした学校ストレスサーに関する性差の研究は、三浦・川岡(2008)⁽¹²⁾において、女子が男子より得点が高かったストレスサーは「学業」「校則・規則」であった。坂・真中(2002)⁽²⁰⁾では、「成績」「進路」で女子が有意に高く、野口・西村(1999)⁽¹⁶⁾は「生活指導」「友人関係」「教師との関係」で女子が有意に高かったことを報告している。その他の研究でも女子が男子よりストレスサー得点が高いことが指摘されている(例えば、嶋田ら, 1995; 菅・上地, 1996; 三川, (1998)⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽¹¹⁾。

ストレス反応の研究は、新名ら(1990)⁽¹⁵⁾の尺度をもとに、岡安ら(1992)⁽¹⁸⁾は中学生用ストレス反応尺度を作成し、因子分析の結果、「不機嫌・怒り感情」「身体的反応」「抑うつ・不安感情」「無力的認知・思考」の4因子を抽出している。また、嶋田ら(1995)⁽²⁵⁾、吉原・藤生(2005)⁽³²⁾は高校生を対象にストレス反応尺度を作成しているが、同じような内容で4因子構造となっている。ストレス反応尺度は、この因子構造をもとに作成されているものが多いと思われる。

また高校生を対象としたストレス反応における性差の研究は、坂・真中(2002)⁽²⁰⁾は、「身体反応」「抑うつ・不安」で女子の方が有意に高いことを報告している。菅・上地(1996)⁽²⁰⁾は、「不機嫌・怒り」で男子が有意に高いことを指摘している。性差がみられる場合は、「抑うつ・不安」で女子の方が高く、「不機嫌・怒り」では男子の方が高いことが示唆される。一方で坂野ら(1994)⁽²¹⁾は、「無気力」「不機嫌・怒り」「抑うつ不安」で性差は見られなかった。嶋田ら(1995)⁽²⁵⁾でも同様に有意な性差は見られず、性差について一定していない。

友人関係は、三浦・川岡(2008)⁽²⁰⁾の学校ストレスサーに見られるように、学校ストレスに影響を与える要因の一つとなっている。吉原・藤生(2005)⁽³²⁾では、友人関係をどのように志向するのか、友人関係のあり方について分類している。ここでは、関(1982)⁽²²⁾の肯定的な反応を他者に向ける傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する概念である依存性の観点から、井ノ崎(1997)⁽⁴⁾の尺度を参考に友人関係性尺度を作成している。特定の相手とともにいて、自己の行動の準拠として他者を必要としている「依存性」、依存することへの不安から他者を受け入れない「関係拒否性」、自律的であるが、同時

に他者にも関心を示す「親密性」、他者への関心を示さない「無関心性」の4つに分類している。

友人関係における性差は、関(1982)⁽²²⁾では大学生を対象にして対人関係において女子は依存性得点が高く、男子は関係拒否性得点が高いことを指摘している。久米(2001)⁽⁷⁾では、関(1982)⁽²²⁾の尺度をもとに、友人関係の性差について調査し、依存性得点には性差が見られなかったこと、関係拒否性得点は男子が有意に高いこと、親密性得点では女子が有意に高いことを報告している。中園・野島(2003)⁽¹⁴⁾は、大学生を対象に友人関係の性差を検討し、無関心群は女性より男性に多かったと指摘している。これらの研究により、大学生においては、親密性や依存性といった、対人関係の結びつきを高める関係性においては女子の得点が高く、関係拒否や無関心といった、対人関係の結びつきを好まない関係性においては男子の得点が高いことを示されている。

次に、学校ストレスサー、ストレス反応、友人関係における関連性について概観する。

近年のストレス研究はLazarus & Folkman(1984)⁽⁸⁾のストレスモデルの立場からの研究が多く、学校ストレスに関する研究は学校ストレスサーとストレス反応の直線的系列を大枠で仮定している。吉原・藤生(2005)⁽³²⁾は、主観的学校ストレスサーとストレス反応の関係について、主観的学校ストレスサーの6つの下位尺度と、ストレス反応の4つの下位尺度である「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「身体的反応」「無気力」との関係について調査している。「自己能力の低さ」ストレスサーと「抑うつ・不安」「無気力」、「人から受ける不利益」ストレスサーと「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「身体的反応」、「有意義な時間の欲求」ストレスサーと「不機嫌・怒り」「無気力」、「人からの評価」ストレスサーと「無気力」、「人とのつきあい方」ストレスサーと「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の間に関連性があることを指摘している。一方、日常場面における学校ストレスサーとストレス反応の関係については、坂・真中(2002)⁽²⁰⁾では「成績」ストレスサーと「不機嫌・怒り」、「進路」ストレスサーと「不機嫌・怒り」「身体反応」「抑うつ・不安」、「注意」ストレスサーと「不機嫌・怒り」「抑うつ・不安」の間に関連性があることを見出している。主観的学校ストレスサーも日常場面における学校ストレスサーも、ストレス反応と密接な関係があることが示唆される。特に主観的学校ストレスサーはストレス反応へ多くの有意なパスがみられ、ストレス反応を予測する要因となっている。

また友人関係のあり方と学校ストレスとの関連についての研究は、吉原・藤生(2005)⁽³²⁾では友人関係性尺度を外生変数、主観的学校ストレスサー尺度とストレス反応尺度を内生変数としたモデルを作成して、各変数間における影響関係についてパス解析を用いて検討している。そ

の結果、友人関係のあり方が親密であることはストレス反応を低減する可能性が示唆された。また無関心であることは無気力反応を引き起こすことが明らかとなっている。

次にこれらの先行研究における問題点について検討を加える。

先行研究では学校ストレスは、日常場面における学校ストレスの視点と主観的学校ストレスの視点が挙げられるが、日常場面における学校ストレスは、教師の対応は環境調整を中心とした対応にならざるを得ず、学校現場での対応には限界があるのではないかと思われる。それに対して主観的学校ストレスは生徒の主観を捉えたストレスとなっているので、認知の改善によりストレスを低減することが可能となることが考えられる。このような観点から日常場面における学校ストレスを捉えることより、主観的学校ストレスを捉えることはストレス低減のためには有用であると思われる。しかし日常場面における学校ストレスの研究は盛んに行われているが、まだ主観的学校ストレスに関する研究はあまり進んでいない。今後さらに研究を進めることが望まれる。

また学校ストレスにおける性差では、日常場面における学校ストレス得点は、ほとんどの尺度で男子より女子の方が高いことが明らかとなっている。一方で主観的学校ストレスでは、どのような性差が生じているのか研究は進んでいない。主観的学校ストレス得点においても、男子より女子の方が高くなるのか調査する必要があると思われる。

ストレス反応の性差については、先行研究において一貫した性差が見られなかった。どのような性差が存在するか、さらに検討する必要があると思われる。

友人関係における性差についての研究は、主に大学生を対象としており、友人関係において高校生は大学生と同じような性差が存在するのかわらかになっていない。ホームルームにおける友人関係を中心とする高校生と、多様なグループが存在し、その中で形成される友人関係を持つ大学生では性差が異なる場合も考えられる。

学校ストレス、ストレス反応、友人関係の関連性における性差の研究について、先行研究では、学校ストレスとストレス反応との関連において、性差について検討を行っている研究はほとんど見られなかった。また、友人関係のあり方と学校ストレス、ストレス反応との関係について性別によるメカニズムを検討した文献はほとんど見られない。ストレス反応要因にどの友人関係要因が影響を与えているのか、また、ストレス反応要因にどの学校ストレス要因が影響を与えているのか、男女別に明らかにすることができれば、性別を考慮して友人関係のあり方への対応や、学校ストレスへの対応を考えることができると思われる。

以上より本研究では、第1に、学校ストレスとして

主観的学校ストレスを取り上げ、主観的学校ストレス、ストレス反応、友人関係の各因子における性差について検討することを目的とする。第2に吉原・藤生(2005)⁽³²⁾の高校生の友人関係のあり方と主観的学校ストレス、ストレス反応との関係におけるモデルをもとに、性別によるメカニズムの違いを明らかにすることを目的とする。

II 方法

1. 対象者

公立高校全日制普通科3校1, 2年男子207名, 女子274名, 合計483名(A校1年男子42名, 1年女子107名, 2年男子20名, 2年女子25名。B校1年男子36名, 1年女子42名, 2年男子58名, 2年女子57名。C校1年男子26名, 1年女子25名, 2年男子27名, 2年女子18名)。高校入試により高校間の学力差が見られる実態を踏まえ、できるだけ偏りをなくし、一般的な高校生の実態が把握できるように、学力によって上位校, 中位校, 下位校に分けてサンプリングを行った。また高等学校における普通科の比率が高い状況から、本研究では普通科に絞ってサンプリングを行った。

本研究のデータは、吉原・藤生(2005)⁽²⁵⁾で用いたデータを利用し、性別による影響という新たな視点から検討を行った。

2. 調査測度

①主観的な内容に焦点を当てた学校ストレス尺度(以下、主観的学校ストレス尺度): 吉原・藤生(2001)⁽³⁰⁾で作成された50項目の尺度。高校生が日常の学校生活で感じるストレスについて、普通の学校生活における経験頻度とその主観的な嫌悪性をそれぞれ4件法で(0~3点)で評定を求める形式である。岡安ら(1992)⁽¹⁷⁾の先行研究にならい、これらを掛け合わせた値をストレス得点とした(0~9点)。下位尺度は「情けないと感じるとき」、「自分の未熟さを感じる」という項目を含む「自己能力の低さ」(12項目)、「人がきれいな事を並べて自分を正当化していると感じるとき」、「自分の意見を聞いてもらえず相手の意見を押し付けられたと感じるとき」という項目を含む「人から受ける不利益」(10項目)、「自分の使える時間が減らされたと感じるとき」、「遊び足りないと感じるとき」という項目を含む「有意義な時間の欲求」(10項目)、「人に嫌われていると感じるとき」、「人が自分の悪口を言っていると感じるとき」という項目を含む「人からの評価」(6項目)、「人とうまくやれないと感じるとき」、「わかってもらえる相手がいないと感じるとき」という項目を含む「人とのつきあい方」(7項目)、「失敗したくないと感じるとき」、「結果が悪そうだと感じる」という

項目を含む「悪い結果の予想」(5項目)であった。尺度についての妥当性は吉原・藤生(2001)⁽³⁰⁾で検証されており、 α 係数は.73～.88の範囲で十分な値を示しており信頼性が得られている。

②ストレス反応尺度：吉原・藤生(2005)⁽³²⁾で作成された16項目の尺度。ストレス反応の表出の程度を4件法(0～3点)で評定する。下位尺度は、「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り感情」「身体的反応」「無気力的認知・思考」(各4項目)であった。尺度についての妥当性は吉原・藤生(2005)⁽³²⁾で検証されており、 α 係数は.76～.87の範囲で十分な値を示しており信頼性が得られている。

③友人関係性尺度：吉原・藤生(2005)⁽³²⁾で作成された29項目の尺度。友人との関係におけるスタンスを5件法(0～4点)で評定する。下位尺度は、依存することへの不安から他者を受け入れない「関係拒否性」(10項目)、自律的で同時に他者にも温かい相互的な関係を楽しむ「親密性」(6項目)、自己の行動の準拠棒として絶えず他者を必要としているようなあり方の「依存性」(9項目)、依存することの不安も感じずにすべての人に関心を示さない「無関心性」(4項目)であった。尺度についての妥当性は吉原・藤生(2005)⁽³²⁾で検証されており、 α 係数は「無関心性」で.69と低い値を示したが、他の下位尺度は.78～.85の範囲で十分な値を示した。

3. 手続き

調査は対象者の学校においてロングホームルームの時間の一部を使って行った。調査は対象者の負担を考慮2回に分けて実施した。1回目は主観的学校ストレス尺度について調査を行い、2回目はストレス反応尺度と友人関係性尺度について調査を行った。回答は無記名で対象者のペースで進められた。ただし、1回目と2回目の対象者の質問紙を照合させるためにどちらにも同じ記号を記入するように指示した。回答時間は、1回目は約30分、2回目は約20分であった。

III 結果

1. 各尺度の平均値における性差

分析には統計ソフトSPSSver.12.0を用いた。各下位尺度を構成する各項目の合計点を下位尺度得点とし、各下位尺度得点の平均値の差について t 検定を行い性差について検討した(表1)。

その結果、主観的学校ストレス尺度では、「人から受ける不利益」において、得点は男子が女子より有意に高く($t(408.55)=3.82, p<.01$)、「自己能力の低さ」「悪い結果の予想」において、得点は女子が男子より有意に高かった($t(481)=2.61, p<.01; t(481)=1.95, p<.05$)。男子は人から受け取る不利益のストレスが女子より高いことが明らかになった。女子は自己能力の低さに対するスト

レスサーと悪い結果の予想に対するストレスが男子より高いことが示された。

ストレス反応尺度では、「不機嫌・怒り感情」において、得点は男子が女子より有意に高かった($t(481)=2.67, p<.01$)。また「抑うつ・不安」において、得点は女子が男子より有意に高かった($t(481)=3.18, p<.01$)。男子は不機嫌・怒り感情が高く、女子は抑うつ・不安が高いことが明らかとなった。

友人関係性尺度では、「関係拒否性」と「無関心性」において、得点は男子が女子より有意に高く($t(481)=4.51, p<.01; t(390.52)=6.05, p<.01$)、「親密性」において、得点は女子が男子より有意に高かった($t(411.86)=8.36, p<.01$)。友人関係拒否や無関心といった、友人との結びつきを好まない関係性では男子の方が高く、親密な関係といった、友人との結びつきを高める関係性は、女子の方が得意であることが明らかとなった。

2. 高校生の主観的学校ストレスとストレス反応、友人関係との関連における性差

分析には統計ソフトAmos4.02を用いた。多重共線性の問題を避けるため、以下の分析では下位尺度得点を使用せず、おのおのの尺度について因子分析(バリマックス回転)を行い、因子得点を採用した(因子分析結果は、吉原・藤生(2001)⁽³⁰⁾、吉原・藤生(2005)⁽³²⁾を参照のこと)。主観的学校ストレス尺度、ストレス反応尺度、友人関係性尺度の3つの尺度の得点の関係については、吉原・藤生(2005)⁽³²⁾のモデルの適合度が十分な数値であったため、このモデルを採用した。モデルは友人関係性尺度を外生変数、主観的学校ストレス尺度とストレス反応を内生変数として各変数間における影響関係を想定し、男女別にパス解析を用いて検討した(図1、図2)。男子のモデルの適合度指標は、 $GFI=.930$ 、 $AGFI=.891$ 、 $CFI=.818$ 、 $RMSEA=.054$ であった。女子のモデルの適合度指標は、 $GFI=.955$ 、 $AGFI=.927$ 、 $CFI=.894$ 、 $RMSEA=.037$ であった。

(1)主観的学校ストレスとストレス反応の関係における性差

男女とも、主観的学校ストレスからストレス反応に多くの有意なパスが確認された。特に女子は男子に比べ、主観的学校ストレスから「抑うつ・不安」への有意なパスが多く見られ、「自己能力の低さ」「人から受ける不利益」「有意義な時間の欲求」「人からの評価」「人とのつきあい方」から「抑うつ・不安」への有意なパスが確認された($\chi^2(64)=3.66, p<.01; \chi^2(64)=2.62, p<.01; \chi^2(64)=2.45, p<.05; \chi^2(64)=2.79, p<.01; \chi^2(64)=4.57, p<.01$)。また男子は女子に比べ、主観的学校ストレスから「無気力的認知・思考」への有意なパスが多く

表1 各尺度の下位尺度得点の平均と標準偏差と性差の *t* 検定結果

下位尺度		男子(N=209)	女子(N=274)	全体(N=483)	<i>t</i> 値	自由度
友人関係性尺度	関係拒否性	17.22 (7.11)	12.85 (7.00)	14.74 (7.37)	4.51**	481
	依存性	16.67 (6.68)	18.75 (6.13)	17.85 (6.45)	1.63	481
	親密性	11.92 (5.00)	16.15 (4.67)	14.32 (5.25)	8.36**	411.86
	無関心性	5.50 (3.27)	3.42 (2.71)	4.32 (3.13)	6.05**	390.52
主観的 学校 スト レス サ ー 尺 度	自己能力の低さ	41.63 (24.89)	45.95 (24.30)	44.01 (24.63)	2.61**	481
	人から受ける不利益	24.65 (27.02)	20.58 (14.76)	22.34 (15.89)	3.82**	408.55
	有意義な時間の欲求	36.78 (19.51)	35.17 (17.98)	35.87 (18.66)	0.93	481
	人からの評価	13.80 (10.50)	15.00 (11.87)	14.48 (11.31)	1.26	481
	人とのつきあい方	14.19 (12.81)	13.96 (12.00)	14.06 (12.34)	0.72	481
	悪い結果の予想	17.31 (10.30)	18.57 (10.73)	18.03 (10.56)	1.95*	481
ス ト レ ス 反 応 尺 度	抑うつ・不安	2.97 (3.12)	3.39 (2.88)	3.20 (2.99)	3.18**	481
	不機嫌・怒り	4.24 (3.28)	3.71 (2.99)	3.94 (3.13)	2.67**	481
	身体的反応	3.40 (2.81)	3.11 (2.53)	3.24 (2.66)	1.41	481
	無気力的認知・思考	4.85 (2.90)	4.92 (2.53)	4.89 (2.69)	0.49	481

1)各セルの値は平均値,()は標準偏差

2)* $p < .05$, ** $p < .01$

3)自由度が小数の尺度はWelch-testによる

見られ、「自己能力の低さ」「人から受ける不利益」「有意義な時間の欲求」「人からの評価」から「無気力的認知・思考」への有意なパスが確認された($\chi^2(67)=2.91$, $p < .01$; $\chi^2(67)=-2.30$, $p < .05$; $\chi^2(67)=4.78$, $p < .01$; $\chi^2(67)=3.48$, $p < .01$)。主観的學校ストレスからストレス反応の影響において、性別によるメカニズムの違いが確認された。

(2) 友人関係と主観的學校ストレスの関係における性差

友人関係から主観的學校ストレスへのパスは、女子の方に有意なパスが多く見られ、男子は有意なパスがほとんどなく、性別によるメカニズムの違いが明らかになった。女子では「関係拒否性」「依存性」から「人から受ける不利益」に有意なパスが見られた($\chi^2(64)=3.44$, $p < .01$; $\chi^2(64)=-3.43$, $p < .01$)。男子では友人関係から「人から受ける不利益」に有意なパスは見られなかった。女

子では「依存性」から「有意義な時間の欲求」に有意なパスが見られた($\chi^2(64)=2.12$, $p < .05$)。男子では友人関係から「有意義な時間の欲求」に有意なパスは見られなかった。女子では「依存性」から「悪い結果の予想」に有意なパスが見られた($\chi^2(64)=2.56$, $p < .05$)。男子では友人関係から「悪い結果の予想」に有意なパスは見られなかった。「自己能力の低さ」「人からの評価」「人とのつきあい方」には、友人関係から有意なパスに性差は見られなかった。

(3) 友人関係とストレス反応の関係における性差

友人関係からストレス反応への有意なパスは女子に比べ男子に多く、性別によるメカニズムの違いが確認された。「抑うつ・不安」に有意なパスがみられたのは、男子は「依存性」であり($\chi^2(67)=2.33$, $p < .05$)、女子には有意なパスは見られなかった。「不機嫌・怒り」に有意

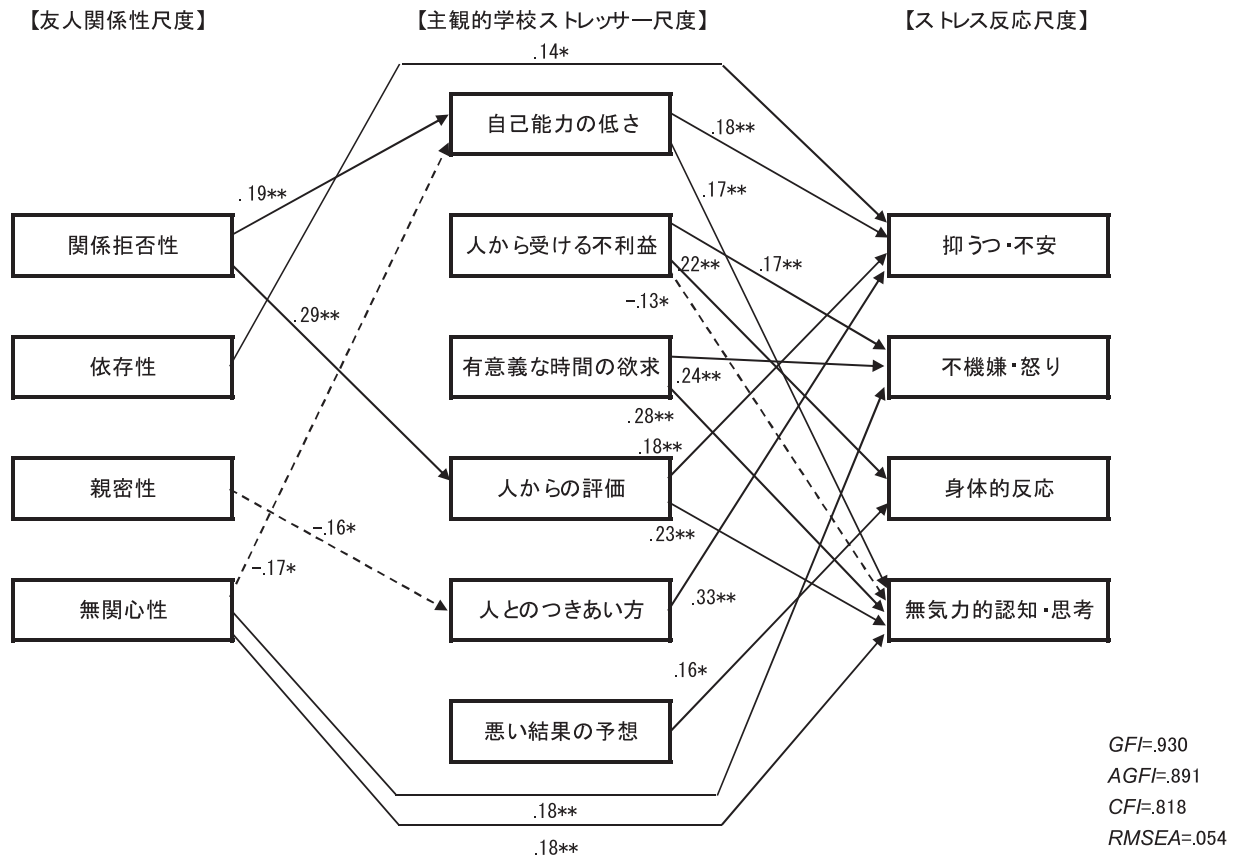


図1 男子高校生の友人関係とストレス、ストレス反応のパス・ダイアグラム
(実線は有意な正のパス, 点線は有意な負のパス, * $p < .05$, ** $p < .01$)

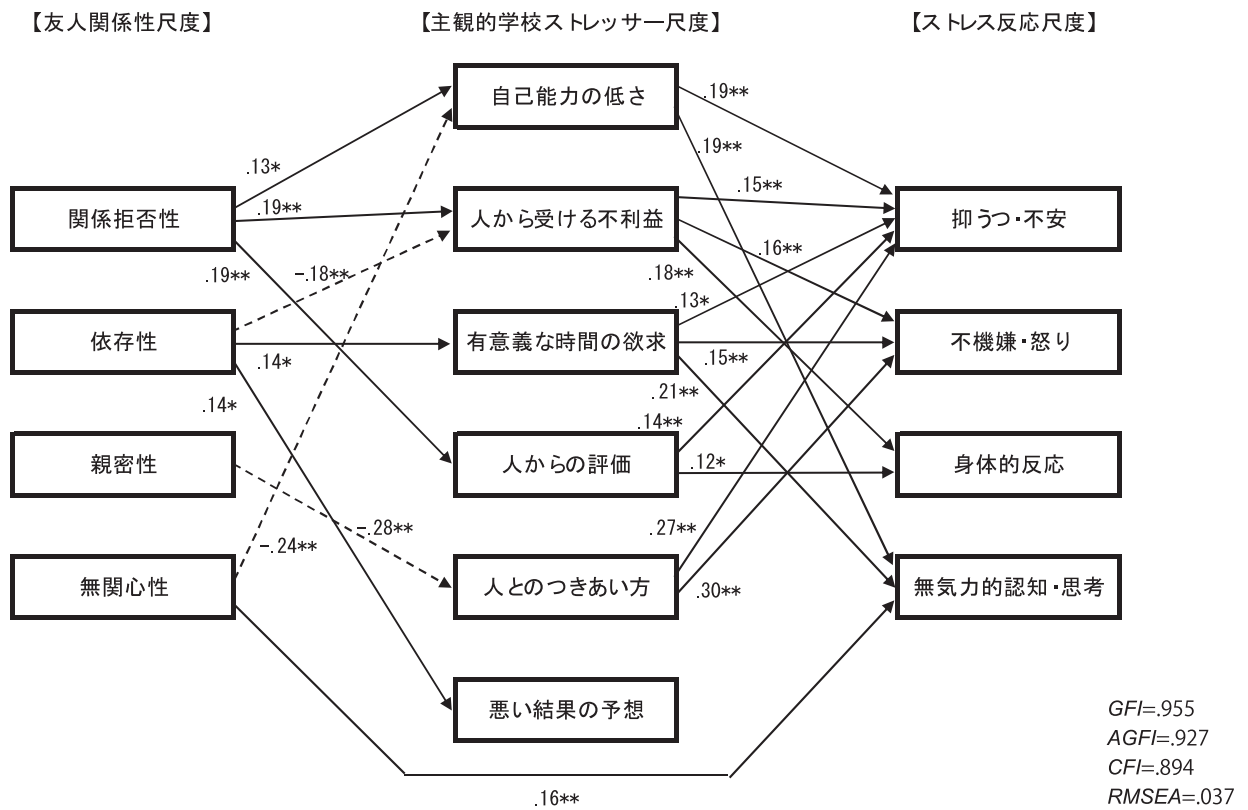


図2 女子高校生の友人関係とストレス、ストレス反応のパス・ダイアグラム
(実線は有意な正のパス, 点線は有意な負のパス, * $p < .05$, ** $p < .01$)

なパスが見られたのは、男子は「無関心性」であり($\chi^2(67)=2.71, p<.01$), 女子には有意なパスは見られなかった。友人関係から「身体的反応」「無気力的認知・思考」へのパスに性差は見られなかった。

(4) 性別によるメカニズムの違い

男子は女子より、友人関係の「依存性」「無関心性」からストレス反応への直接効果を表す正のパスが多く見られた。一方で女子は男子より、友人関係の「関係拒否性」「依存性」から、主観的学校ストレスを認知してストレス反応への間接効果を表すパスが多く見られた。

IV 考察

1. 各尺度の平均値における性差の検討

主観的学校ストレス尺度では、「人から受ける不利益」において、得点は女子が男子より有意に低かった。攻撃行動研究において、攻撃には直接的攻撃行動と間接的攻撃行動があることが明らかになっている。小田部・加藤(2007)⁽⁶⁾によれば、直接的攻撃行動を受ける経験が男子の方が女子に比べ多く、間接的攻撃行動を受ける経験は女子の方が男子より多いことを指摘している。人から受ける不利益ストレスの項目の中には、「自分の意見を聞いてもらえず相手の意見を押しつけられたと感じるとき」というような、高校生にとっては直接的な攻撃行動として受け取られる可能性がある項目が含まれていると思われる。そのため、女子は男子より有意に得点が低くなったと考えられる。日常場面における学校ストレスを扱った先行研究では、男子が女子よりストレスが高いという結果はほとんどなく、「人から受ける不利益」のストレスの性差は主観的学校ストレス特有の結果であると言える。

「自己能力の低さ」「悪い結果の予想」において、得点は女子が男子より有意に高く、女子は自己に対する評価や将来に対する評価が男子より低く、ストレスとなっていることが明らかになった。自己能力の低さのストレスは自尊心や自己評価と関連していると考えられる。渡邊(1998)⁽²⁹⁾では自尊心や自己評価は小学校高学年ごろから女子の方が低くなり、その後年齢とともに性差が大きくなっていることを指摘しており、高校生においても本研究の結果を支持する結果となっている。また鍋島(2003)⁽¹³⁾によれば高校生の発達段階では、女子の方が男子より自分の身体や容姿を気にしたりすることを明らかにしており、自己の内省に対する厳しさがあることも考えられる。そのためこのような性差が表れた可能性が示唆される。また悪い結果の予想のストレスは不安と関連した内容になっているが、Sadock&Sadock(2003)⁽¹⁹⁾では不安は女子の方が高いことを指摘している。もともと不安に対する性差は女子の方が

高いことから、悪い結果の予想のストレスにおいて女子の方が高い可能性が考えられる。一方で、吉原・藤生(2003)⁽³¹⁾では「自己能力の低さ」と「学業」「友人関係」との正の相関があることを、また「悪い結果の予想」は「学業」と正の相関があることを見出している。日常場面における学校ストレスを測った先行研究では、三浦・川岡(2008)⁽²⁰⁾は、「学業」で、野口・西村(1999)⁽¹⁶⁾は「友人関係」で、女子の方が男子よりストレス得点が高いことを報告している。高校生活では、男子より女子の方が学業や友人関係に関してストレスを高く感じていることが考えられる。これらの結果から、「自己能力の低さ」「悪い結果の予想」は男子より女子の方が高くなることが示唆される。

ストレス反応尺度では、「抑うつ・不安」においては、得点は女子が男子より有意に高かった。坂・真中(2002)⁽²⁰⁾は、「抑うつ・不安」で女子の方が有意に高いことを報告している。また一般のうつ病も女子の方が男子よりうつ病になりやすいことが指摘されており(例えば、Sadock&Sadock, 2003)⁽¹⁹⁾, 抑うつにも同じような傾向があることが予想される。同様にSadock&Sadock(2003)⁽¹⁹⁾によれば不安についても女子の方が男子より高いことが報告されている。女子が男子より抑うつ・不安が高い理由として、松並(2008)⁽¹⁰⁾は性役割の観点から、女性の方が抑うつや不安が高まるのではないかと指摘している。抑うつ・不安については、特に女子に配慮することが大切であると言える。

また「不機嫌・怒り感情」において、得点は男子が女子より有意に高かった。菅・上地(1996)⁽²⁰⁾は、「不機嫌・怒り」で男子が有意に高いことを報告しており、先行研究と同様の結果となっている。男子は女子よりも怒りの表出をすることが多く、高いストレス反応となっていると言える。一般にストレスが内在化すると抑うつが高くなり、外在化すると怒りが表面に現れる。性役割の観点から見ると男子は外在化する傾向があり、女子は内在化する傾向にあるのではないかと。その結果、男子は「不機嫌・怒り感情」が高まり、女子は「抑うつ・不安」が高くなるのではないかとと思われる。

友人関係性尺度では、「関係拒否性」と「無関心性」において、得点は男子が女子より有意に高かった。関(1982)⁽²²⁾では男性は「関係拒否性」が高いことを指摘しており、中園・野島(2003)⁽¹⁴⁾は、「無関心群」は女性より男性に多かったと報告しており一致する結果であった。また「親密性」において、得点は女子が男子より有意に高かった。これは久米(2001)⁽⁷⁾と一致する結果であった。高校生の友人関係においては、大学生の対人関係と同様に友人関係の結びつきを好む関係性では女子が、友人との結びつきを好まない関係性では男子が高いことが支持される結果となった。

友人関係における性差はなぜ生じるのだろうか。これらの性差が生じる理由の一つとして、従来から指摘されているような社会的役割観が影響しているのではないかと思われる(例えば、久米, 2001; 柏尾, 2005)⁽⁷⁾⁽⁵⁾。すなわち男子は達成、競争、独立といった人に頼らない態度を身につけさせられ、そうした態度を内在化していると考えられる。一方、女子は暖かさ、親密感、表情の豊かさを身につけさせるように育てられ、より友人への関心を示し、暖かい相互関係を築くと考えられる。男子は人に頼らない態度を身につけさせられることにより、女子よりも友人関係を拒否して孤立した関係を好んだり、友人に対する無関心さが増したりするのではないかと思われる。女子は親密感を持って育てられ、友人により暖かい関係を求めようとすることから親密性が高まるのではないかと考えられる。また、榎本(1999)⁽¹⁾は男女の交友関係の違いにおいて、女子は親密な関係を作ることが交友関係では重視されていることを指摘しており、この点からも「親密性」において女子の方が高くなったと考えられる。

2. 主観的学校ストレスとストレス反応、友人関係のあり方のメカニズムにおける性差の影響

(1) 主観的学校ストレスとストレス反応との関係における性差の検討

吉原・藤生(2005)⁽³²⁾と同様に、男女とも主観的学校ストレスからストレス反応への影響が多く見られたが、その影響は男女で異なっており、主観的学校ストレスとストレス反応の間には、性別ごとにメカニズムが異なることが明らかになった。

性別によるメカニズムの違いは主観的学校ストレスからストレス反応の「抑うつ・不安」への影響において、特に女子はほとんどのストレスが「抑うつ・不安」に影響を与えており、男子に比べて「抑うつ・不安」を高めるストレスから有意なパスが多くあることが明らかとなった。田中(2005)⁽²⁸⁾では女子は一般的にストレスに対する自覚が高いことを指摘しており、本研究においても女子は、「抑うつ・不安」に影響を与えるストレスを多く自覚すると考えられる。また前述のように本研究では、「抑うつ・不安」は女子の方が男子より高いことが明らかとなったが、その理由の一つとして、女子の方が多くの種類の主観的学校ストレスからの影響を受けていることから「抑うつ・不安」が高まる可能性が示唆された。女子の「抑うつ・不安」についての対応は、異なる種類の主観的学校ストレスの存在を考慮しながら行う必要があると思われる。

主観的学校ストレスからストレス反応の「無気力的認知・思考」への影響において、特に男子は女子より多くの種類の主観的学校ストレスが「無気力的認

知・思考」に影響を与えていることが明らかになった。本研究では、前述のように「無気力的認知・思考」では性差が見られなかったが、多くの種類の主観的学校ストレスの影響を受けて「無気力的認知・思考」が高まっていることが示唆された。男子の「無気力的認知・思考」についての対応は、異なる種類の主観的学校ストレスの存在を考慮しながら行う必要があると思われる。

(2) 友人関係のあり方と主観的学校ストレスとの関係における性差の検討

吉原・藤生(2005)⁽³²⁾では男女を合わせたモデルの検討を行っているが、比較すると吉原・藤生(2005)⁽³²⁾における友人関係から主観的学校ストレスへのパスは有意なパスは少なかった。しかし男女別で分析した結果、男女を合わせた分析では見られなかった有意なパスが増加していた。性差の特徴として、全体的には友人関係のあり方から主観的学校ストレスへの有意なパスは男子に比べ女子の方に多くみられ、友人関係から主観的学校ストレスへの影響は男女でメカニズムが違うことが明らかとなった。

女子では、「関係拒否性」「依存性」から「人から受ける不利益」に有意なパスが見られたが、男子では見られなかった。女子は男子に比べて、友人への依存を望みつつも関係を拒否する状況は、相手からの働きかけ自体が自分に対する不利益と捉えられる可能性が示唆される。また、友人への依存は、相手への配慮から自己に我慢を強いられることになりかねない。そのことが自分に対する不利益と認知することから、有意なパスが見られたのではないかと考えられる。一方で男子は拒否的な関係や依存的な関係では、女子のように人から受ける不利益と認知しないと思われる。

女子では「依存性」から「有意義な時間の欲求」「悪い結果の予想」に有意なパスが見られたが、男子では見られなかった。女子にとって依存的な友人関係は、自分が望まない状況で相手に合わせて一緒に行動を共にすることで、自分の時間を減らされたと感じるのかもしれない。

女子では「依存性」から「悪い結果の予想」に有意なパスが見られたが、男子では見られなかった。悪い結果の予想は失敗したくないと感じたり、人前で恥をかきたくないと感じたりする内容であり、依存的な友人関係の場合、友人に対する失敗や恥をストレスと感じやすくなっていると思われる。

(3) 友人関係のあり方とストレス反応との関係における性差の検討

全体的には友人関係からストレス反応への有意なパスは少なく、直接的な影響は小さいことが明らかとなっ

た。しかし男女差においては友人関係からストレス反応への有意なパスは女子より男子の方に多く見られ、直接的な影響は男子の方が多様であることが明らかとなった。

友人関係の「依存性」から、男子は「抑うつ・不安」に正の有意なパスが見られ、女子には有意なパスは見られなかった。久米(2001)⁷⁾の指摘するように、従来男子は人に頼らない態度を身につけさせられ、そうした態度を内在化していると考えられており、友人に依存する男子は、従来からの男子のあり方との矛盾を抱えてしまうことが考えられる。男子はこの矛盾から「抑うつ・不安」のストレス反応を表出することにつながる可能性が示唆された。一方で久米(2001)⁷⁾では、女子は温かさや親密感を強調して育てられるため、より友人への関心を示し、温かい相互的な関係を築くと考えられる、と述べており、女子は依存することに抵抗感は感じられないと思われる。そのため、男子と比べ「依存性」から「抑うつ・不安」へのメカニズムが異なるのではないかと考えられる。

友人関係の「無関心性」から男女ともに「無気力的認知・思考」への有意なパスが見られた。「無関心性」は、男女とも「無気力的認知・思考」に正の有意なパスが見られた。橋本(2000)⁹⁾では、無関心群の適応のよさを指摘していたが、本研究では「無関心」はストレス反応に対して適応的でないことが明らかになった。橋本(2000)⁹⁾においても「無関心」であることは本当に適応的なのか疑問を投げかけていたが、本研究では男女とも適応的でない場合がありうるということが明らかになった。

さらに男子にのみ、友人関係の「無関心性」から「不機嫌・怒り感情」に正の有意なパスが見られた。本研究における「無関心性」は、友人から関わられることに対して煩わしさを感じる項目を含んでおり、友人に対して無関心でいたい、関わりを持つことに対する不機嫌さや怒りを感じていることが予想される。そのような傾向が男子の方が女子より強いことが示唆される。

(4) モデル全体から見た性別によるメカニズムの違い

男子は女子より、依存性や無関心性の友人関係のあり方から、ストレス反応への直接的影響が多く見られた。一方で女子は男子より、関係拒否性や依存性の友人関係のあり方から、主観的学校ストレスを認知してストレス反応への間接的影響が多く見られた。Sherrod(1989)²³⁾によれば、男性は同じような行動を取る人を友人として求めるのに対して、女子は同じように感じてくれる人を友人として求める。つまり男子は友人関係を手段的に捉え、女子は情緒的に捉えていることを指摘している。男子は友人関係を手段として捉えるため、普段友人に接する態度そのものに対して、直接ストレス反応に結びつける傾向があるのではないかとと思われる。女子は友人関

係を情緒的に捉えるため、友人に接する態度に対して、主観的な視点で意味づけを行い、それをストレスラーとして認知する傾向があることが伺える。そして、そのストレスラーに対して、ストレス反応を結びつけるというメカニズムが存在することが示唆される。

この性別によるメカニズムの違いにより、ストレス低減のためには、男女で異なる介入方法を検討する必要がある。男子は友人関係とストレスラーの関連が薄く、それぞれに対して介入していくことが、ストレスの低減のためには必要になると思われる。一方、女子は友人関係と主観的学校ストレスラーは関連しており、友人関係または主観的学校ストレスラーのいずれかに焦点を当てて介入することで、ストレスの低減を図ることができると思われる。

3. 今後の課題

本研究では主観的学校ストレスラーとストレス反応について直線的系列を仮定して、友人関係のあり方との関連について性差の影響を検討した。しかしながら、主観的学校ストレスラーとストレス反応に関する媒介要因として、コーピングやソーシャルサポートなど様々な要因が考えられる。例えば情緒的サポートの受容や提供は男性より女性の方が多いという研究や (Hays&Oxley,1986)⁹⁾、女性が男性よりも問題から距離を置いたり解決をあきらめたりする「消極的・問題回避コーピング」を多く使用している (Long,1990)⁹⁾ ことなどが示されている。これらの媒介要因を含めたストレスモデルにおける性差についてもさらに検討を加えていく必要がある。

— 文 献 —

- (1) 榎本淳子「青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化」『教育心理学研究』47, pp.237-250, 1999
- (2) 橋本剛「大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連」『教育心理学研究』48(1), pp.94-102, 2000
- (3) Hays,R.B.&Oxley,D. Social network development and functioning during a life transition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, pp.305-313, 1986
- (4) 井ノ崎敦子「青年の対人関係性尺度作成の試み」『日本教育心理学会第39回総会発表論文集』pp.218, 1997
- (5) 柏尾眞津子「友だちになる」和田実編『男と女の対人心理学』北大路書房, pp.37-64, 2005
- (6) 小田部貴子・加藤和生「いじめにおける間接的・直接的攻撃の性差：攻撃被害と傷つき程度に注目して」『日本教育心理学会第49回総会発表論文集』pp.350, 2007

- (7) 久米禎子「依存のあり方を通してみた青年期の友人関係－自己の安定性との関連から－」『京都大学大学院教育学研究科紀要』47, pp.488-499, 2001
- (8) Lazarus, R. S. Folkman, S. Stress, appraisal, and coping. Springer Publishing Company Inc., New York, 1984 (本明寛・春木豊・織田正美(監) 1991 ストレスの心理学 [認知的評価と対処の研究] 実務教育出版1991)
- (9) Long, B. C. Relation between coping strategies, sex-typed traits, and environmental Characteristics: A comparison of male and female managers. *Journal of Counseling Psychology*, 37, pp.185-194, 1990
- (10) 松並知子「メンタルヘルスとジェンダー」青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編)『ジェンダーの心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版, pp.189-208, 2008
- (11) 三川俊樹「青年期における生活ストレスと対処行動に関する研究」『カウンセリング研究』21(1), pp.1-13, 1998
- (12) 三浦正江・川岡史「高校生用学校ストレス尺度(SSS)の作成」『カウンセリング研究』41, pp.73-83, 2008
- (13) 鍋島祥郎「高校生のこころとジェンダー」解放出版社 2003
- (14) 中園尚武・野島一彦「現代大学生における友人関係への態度に関する研究－友人関係に対する「無関心」に注目して－」『九州大学心理学研究』4, pp.325-334, 2003
- (15) 新名理恵・坂田成輝・矢富直美・本間昭「心理的ストレス反応尺度の開発」『心身医学』30(1), pp.29-38, 1990
- (16) 野口宗雄・西村博文「学校ストレスおよび学習意欲の阻害要因に関する高校生と教師の認知」『信州大学教育学部紀要』99, pp.133-144, 1999
- (17) 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美「中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係」『心理学研究』63, pp.310-318, 1992
- (18) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二「中学生用ストレス反応尺度作成の試み」『早稲田大学人間科学研究』5(1), pp.23-29, 1992
- (19) Sadock, B. J. & Sadock, V. A. Kaplan & Sadock's synopsis of psychiatry: Behavioral sciences/clinical psychiatry, 9th ed, Philadelphia, 2003 (サドック, B. J. & サドック, V. A., 井上令一・四宮滋子(訳), カプラン臨床精神医学テキスト, 第2版, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2004)
- (20) 坂晴己子・真中陽子「高校生の学校ストレスとソーシャル・サポートおよびコーピングとの関連」『明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要』7, pp.9-18, 2002
- (21) 坂野雄二・嶋田洋徳・三浦正江・森治子・小田美穂子・猿橋末治「高校生の認知的個人差が心理ストレスに及ぼす影響」『早稲田大学人間科学研究』7, pp.75-90, 1994
- (22) 関知恵子「人格適応面からみた依存性の研究－自己像との関連において－」『京都大学教育学部心理教育相談室臨床心理事例研究』9, pp.230-249, 1982
- (23) Sherrod, D. The influence of gender on same sex friendships. In C. Hendrick (Ed.), *Close relationships*. Newbury Park, CA: Sage, pp.164-186, 1989
- (24) 嶋田洋徳「小中学生の心理ストレスと学校不適応に関する研究」風間書房 1998
- (25) 嶋田洋徳・鈴木敏城・神村栄一・國分康孝・坂野雄二「高校生の学校ストレスとストレス反応との関連」『日本カウンセリング学会第28回大会発表論文集』pp.142-143, 1995
- (26) 菅徹・上地安昭「高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察」『カウンセリング研究』29, pp.197-207, 1996
- (27) 武井和弘「心理描写項目を用いた中学生用学校ストレス尺度の開発」『上越教育大学修士論文』(未公刊) 1998
- (28) 田中健吾「対人関係の問題に対処する」和田実編『男と女の対人心理学』北大路書房, pp.159-177, 2005
- (29) 渡邊恵子「女性・男性の発達」柏木恵子編『結婚・家族の心理学』ミネルヴァ書房 pp.233-292, 1998
- (30) 吉原寛・藤生英行「主観的内容に焦点を当てた学校ストレス尺度の作成」『上越教育大学心理教育相談研究』1, pp.37-47, 2001
- (31) 吉原寛・藤生英行「学業・友人関係場面ストレスと主観的ストレスの関係」『上越教育大学心理教育相談研究』2(1), pp.17-23, 2003
- (32) 吉原寛・藤生英行「友人関係のあり方とストレス、ストレス反応の関係」『カウンセリング研究』38, pp.128-140, 2005